

左千夫先生への追憶

石原純

青空文庫

左千夫先生のことを憶うと、私にはいかにも懐かしい気分が湧いてくる。あの大きな肥った身体、そしてみなりなどにかまわない素朴な態度、その平淡なかに言い知れぬ深いところを湛えて我々に接せられたことなどに対し、私はどんなに懐かしさを感じているかわからないほどである。

「馬酔木」がはじめて発刊せられたのは明治三十六年のことであった。それ以前から根岸派の歌に親しんでいた私はこれを嬉しく思いながら、先生のことを想像していた。その時分は大学の学生であったが、まだ見知らぬ人をいきなり尋ねて行ってよいかどうかを思いまどいながら数箇月を過ごしてしまった。そのうちに毎

月の歌会が先生の宅で開かれるようになったので、この年の秋過ぐるころに、私ははじめてその歌会の日を訪ねて行つた。牛乳屋の硝子戸ガラスのはまった入口のかたわらに、少し奥まったところに格こ子戸うしどの玄関が別にあつた。そこで案内を乞いながら私ははじめて先生のあの懐かしい面に接したのであつた。この折りに見た炉ろをきつた座敷や、愛蔵せられていた茶釜や、無むいちじん一塵の額面や、それらは今でも私の眼前にちらついて見えるようである。そして先生のおもかげと結びついて私の脳裡のうりに消されずにのこっている。

本所茅場町ほんじよかやばちようの先生の家は、もう町はずれの寂しいところであつた。庭さきの墻かきの外にはひろい蓮沼はすぬまがあつて、夏ごろは蛙かわずが喧やかましいように鳴いていた。五位鷺ごいさぎや葭よしき切りのなく声などもよ

く聞いた。そこで牛を飼っていながら、茶を楽しみ、歌や文学や
絵画を論じていられた先生は、実に高尚な趣味に徹した人であつ
た。雑然たる都会のなかに住んでいた私には、暇を見つけては先
生のもとに行つて、その閑かんせき寂な趣味のなかに浸ひたることのできる
のを、この上なく嬉しく思ったことであつた。いつもあまりなが
く話して、知らない間に夜をふかしてしまうこともしばしばあつ
た。まだ電車などまるでなかつたころであつたから、本郷ほんごうの家
まで帰るのに、もうひっそりと寝しずまった町々を歩いて来たの
であつたが、時々はあまりに遅い時間になつてしまつて、そのま
ま泊とめていただいたことなどもかなりにあつた。

趣味に徹していた先生は、そうであるからと言って趣味に溺おぼれ

る人では決してなかつた。閑寂をもとめ平淡を愛しながら、なお決して世を離れるような退たいえい嬰的な態度をとらしめるに至らなかつた所以はここにあると私は思う。あれほど淡雅な趣味を好んでいた先生が、他面においてはなほだ進取的な若々しい気分や、執つよう拗つような強い自信をもつて、実世間につき進んでゆかれたことなど思うと、むしろ不思議なほどである。この性格において私は先生の偉大さを切実に認めるとともに、そこに少しの厭味いやみをも伴うことなく、どこまでも懐かしさを感じしめることを、まことに貴くも思うのである。

歌論に対する先生の自信はおそらくすべての人々が異常な感をもつてそれに対したほどであった。先生のこころにはそれが絶対

のものであったので、当時世間でもてはやされていた歌などには、まるでその価値を認めずに罵倒ばとうされた。その議論に熱烈であったことはまことに驚くべきほどである。私はあぶらぎって肥こえていた先生の体格が、この強い確信を燃えたたしめる素質となっていたのだと思っている。正岡まさおか子規しきし子の没後、先生がひとりその門弟のなかに抽ぬきんでて、根岸派歌会の中心となつてそれを背負つてゆかれたことも、年齢などの関係もあつたには違いないが、また主としてこの強味をもたれていたからであると思う。中年になつてから、あれだけの小説を書かれたのも、やはり同様の性格に基づくもので、そのころの小説に対する自信もかなりの程度のものであつた。

先生が我々よりも二十年も年上でありながら若い気分をもつていられたことは随所に見られた。本当に友だちのように我々を遇せられていた。歌会のときなど、席上の歌作に苦しんでいると、いつも先生は元気な声で、「そんなことではだめだ、僕はもう数首できたよ」と言つては、我々を励まされた。また私が大学で物理学を専攻していたので、先生はよく物質の分子とか電子とかラジウムとか、それから地球や天体のことなどを、非常な興味をもつて私に尋ねられるのであった。そしてそれらのふしぎな現象をいろいろと心に描きながら、自然の幽幻なありさまや、人間の知識の究極するところの深さに感嘆しておられた。これらのことは、一面には先生が近代教育を受けない素朴な性質をもつておられた

ことにもよるが、それでありながら先生が熱心にこのような知識を解しようとしてられたところに、実に若々しい進取的な気質を私は観取しないわけにはゆかないのであった。

自然に対する驚異、それは本当に敬けい虔けんな心から生まれる。なまなかの学問をしたものはかえってそういう心を失って、自分の浅薄な知識にたよりたがるのである。先生にはそういうことが絶対になかったので、最も深く自然を愛し、これを讚美せられた。明治四十三年五月にかの有名なハリ―彗すいせい星が太陽に近づき、遠くその尾をひいて、それがわが地球にも触れると言われたとき、先生はちようどその折りにできあがった茶室唯ゆい真閣しんかくに我々を待って、このまれな日の感慨を深められた。そのとき書かれた文に

は次の句がある。

(五月十九日) 七十五年ごとに現わるべき彗星のこの世界に最も近づくという日である。わが方丈の一室もようやく工を竣おえ、この日はじめて諸友をここに会した。……十九日はもとより我々の忘ることあたわざる日である。今またこの日をもつてこの会をなす。今後予よをしてさらにこの日を親しましめるであらう。予は永久に毎月この日をもつてこの一室に諸友の来遊を待つことと定めた。

彗星来降の実況は晴天なるにかかわらずついに何ごとをも感ずることができなかつた。夜に入つてはただ月白く風爽さわやかに、若葉青葉の薫かおりが夜気に揺ゆらぐを覚おぼゆるのみである。会は実にお

もしろかりし樂しかりし。

ここで十九日は我々の忘ることあたわざる日であると書かれたのは、正岡子規子の命日に当たるからである。このとき我々は夜を徹するばかりに語りふけて、それから月明のふけわたった静かな街路を、何ものかの変異を心に予感しようとしながら、それぞれの家に向けて帰ったのであった。

偏僻へんびなどころにあつた先生の家のすぐ前には、汽車の高架線があつて、錦糸堀きんしほりの停車場の構内になつていた。夜分静かに話にふけていると、汽車がごうごうと通り過ぎてゆく。沼地につづいたこのあたりの軟らかい地面を揺らがして、地震のようにぐらぐらする。私はいつもの寂さびた心地のなかに、急に近代的の刺戟しげき

を感じさせられるようにも思った。しかしそれにも慣^なれてくると、今度はかえってそれもなくてはならぬもののように平気になつてしまつた。先生の立てられた渋い茶を味わつて、こうして我々は現代に生きていたのである。世の人たちは万^{まん}葉^{よう}崇^{すう}拝^{はい}をいたずらに古めかしい趣味でもあるように見なしていた。先生は万葉精神の体现はたとえ一般人には認められなくとも、それを理想とする少数の我々がここにあるということ、やはり現代思潮の一部として否定すべからざる事実であるとも言われていた。それを今思うと感慨がふかい。

「馬^{あし}酔^{しび}木」時代には、雑誌の編集はほとんど先生一人の仕事であつた。それに対しては非常に熱心でいられたのかかわらず、発

行の遅れないときはないほどであった。きようはぜひやってしまったわなくてはならないと言いながら、訪問者でもあると、それを断わりきれずに、やはりゆつくりと茶を飲んで話していられた。先生のゆつたりした、しかも愛情のみちた性格がこういうところに遺憾なく覗いかれる。第二巻、第三巻のころには印刷所が京橋にあったので、雑誌のできあがった日には、そこへ出かけて行って雑誌を自分でうけとり、それから私の本郷の寓居ぐうきよへ立ちよつて、一いっしよ緒いっしょに発送をするのを例とせられていた。

真間ままで歌会をやつて手古奈てこなの祠ほこらに詣でたことや、千葉の瀬川氏の別荘へ行って歌をつくつたことや、東京湾の観艦式かんかんしきを見るのに川崎におもむいてそこで泊つた折りのことや、多摩川たまがわべりの寺

内で鮎あゆを賞したときのことなど、私には忘れられない記憶となつて残っている。そして袴はかまの股ももだちをとつて田舎道いなかみちを歩いてゆかれた先生の姿など眼のまえに浮かんでくる。甲州御嶽みたけの歌会には私の都合で行をともしることのできなかつたのを、今でも遺憾に思っている。

明治四十五年の三月に私が欧州へ向けて留学の旅に出かける折りに、送別の会を先生のもとで開いていただいた。先生の健康な身体をそのとき限り見ることができなくなろうとは、かりにも予想し得ないことであつた。翌年先生の訃報ふほうを私はスイスのチューリッヒで受けとつたのであつたが、そのとき私はその山腹の下宿の高い窓から、呆然ぼうぜんとして町の向こうの青い湖水の面を見お

ろしながら、孤^{ひと}り離れて遠い思いに浸らないわけにはゆかなかつた。私はやがて故国に帰つて先生に話そうと思つていたいろいろな事がらを、そのままにしないでならないようになってしまつたことを、その時どんなに憾^{うら}んだかしのれない。

西洋の文字を知らなかつた先生は、欧州にいる私に対する手紙の宛名を書くのに、いつも斎藤君^{わづら}を煩^{わづら}わさねばならなかつたが、そういう面倒をあえてしては、いつも真情のこもつた手紙をはるかに送られたことを、私はまことにありがたいと思つている。ドイツから送つた私の歌に対して、「アララギ」第六卷第三号で「歌の潤^{うるお}い」という歌論のもとで、大いに褒^ほめられ、それが先生の最後に近い歌論ともなつたことは、私にとってまことに感銘の

ふかいところである。それはこのころ斎藤君などが新らしい道に進もうとされて、先生からいくら離れるようにも見えることを寂しく思われたのにもよることと思うが、ともかく私はこのことを忘れるわけにはゆかない。

先生が逝ゆかれて、もう七年も過ぎたかと思うと、今さらに年月の経つのがはやい気がする。先生がいままで達者でいられたならどんなであろうなども思っている、近眼鏡を二重にかけた先生のおもかげが眼前にありありと見える気がする。

(一九一九年六月「アララギ」)

青空文庫情報

底本：「随想全集 第九卷」尚学図書

1969（昭和44）年11月5日発行

底本の親本：「随筆集 夾竹桃」文明社

1943（昭和18）年7月20日発行

初出：「アララギ」アララギ発行所

1919（大正8）年7月

※「本所茅場町」は当時の東京市本所区茅場町、「本郷」は同じく東京市本郷区です。

入力：高瀬竜一

校正：フクポー

2018年6月27日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<https://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

左千夫先生への追憶

石原純

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>